

青 木 澄 夫*

Sumio AOKI *



オランダ領東インド（蘭印）時代のスマトラ島メダンにおける1910年代までの日本人社会の形成と変遷

Formation and Changes of Japanese Community in Medan until the 1910s under the Rule of Dutch East Indies

1. 日本女性と子どもの古写真

2009年の夏、海外に在住していた日本人と子どもが写った古い写真を10枚入手した。これらの写真のうち、少なくとも7枚はプロの写真師により撮影されたもので、いずれも多少の傷はあるが、画像は鮮明で人物の様子や背景ははっきりと見てとれる。

図1の写真は、港に停泊する船の上で撮影された2名の洋装者と18名の和装者の日本婦人で、中央に立ちヘルメットをかぶっているのは唯一の男性である。

写真には写真館名が *Asahi* と記され、住所は Medan, Deli, OK, Sumatra とある。Asahi

写真館は、現在のインドネシア共和国北スマトラ州の州都メダン市にあった。

図2は、文金高島田に髪を結った女性二人で、写真師の名前が I. Fujisaki とサインで印字されている。裏（図3）には新嘉坡ヴィクトリア通り381番地藤崎写真館と印刷され、左上には I. Fujisaki, Japansche Photograaf, Medan, Dajalan Kesawan（メダン、ケサワン通りの日本人藤崎写真師）と、オランダ語でスタンプされている。この二人には、中国人写真館で撮影されたもう一枚の写真がある。

図4は、別の二人の若い女性である。プロが撮影したものと思われるが、写真館の名前はない。

残りの6枚は、三十歳前後の母親と3歳くらいの女兒の写真が1枚、同じ女性と5歳くらいの女の子が1枚。それに女兒だけの写真が4枚である。この6枚の写真のうち3枚は、藤崎が撮影したものである。

果たして、このスマトラ島のメダンで撮影された、これらの写真の女性たちはどのような人々なのだろうか。またこの写真はいつごろ撮影されたものだろうか。



図1. 船上の日本人グループ

* 中部大学国際関係学部国際関係学科



図2. 二人の女性



図3. 図2の写真の裏



図4. くつろぐ女性二人（部分）

本稿では、今までほとんど知られてこなかった、スマトラ島メダン及びその近郊地域における1910年代までの日本人社会の形成と発展の過程を追ってみる。

2. 世界無銭探検家中村直吉のメダン訪問

女性たちが撮影されたインドネシア共和国のメダン市は、スマトラ島の北部に位置し、現在は人口200万人を擁するインドネシア第四の大都市である。背後に広大なトバ湖を控えた工業都市で、マラッカ海峡に面し、シンガポールやマレーシアのペナンとも近く交通の要所となっ

ている。(図5)

藤崎写真師が撮影した写真の裏にオランダ語が使われていることから、これらの写真はインドネシアが1945年に独立するまでの、オランダ領東インド（蘭印、蘭領東印度、蘭領印度とも表記される。以下本稿では蘭印と略す）時代の東海岸州メダンで撮影されたものと判断できる。

蘭印時代の東部スマトラ地域では、19世紀後半からヨーロッパ系の民間資本が進出し、タバコ、ゴム、茶などのプランテーション農園を開発し、1910年代後半には日本の企業もゴム園経営に乗り出した。メダンはそれらの商品作物の中心的集荷地となって栄えた町だった。

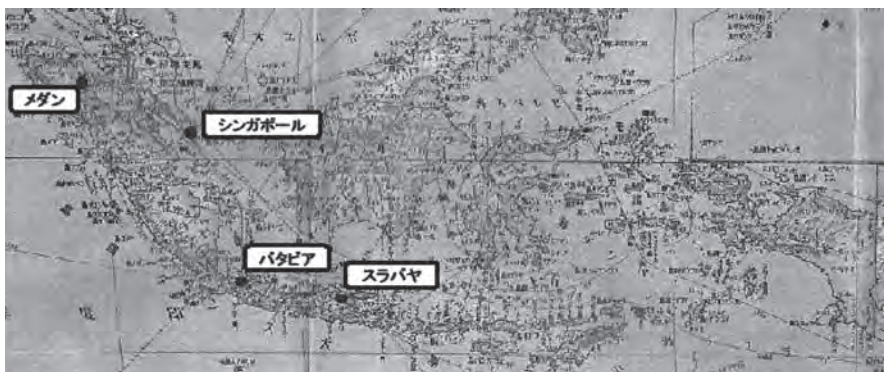


図5. オランダ領東インドの地図を一部加工
雑誌『実業之日本』が特集として発行した南洋号（1915年）の付録地図から

明治開国から第二次世界大戦開始以前における日本人の南洋関与を明らかにした矢野暢によれば、江戸時代に出島ーバタビア(ジャカルタ)の関係があったにもかかわらず、日本人の蘭印への関与は、ほかの東南アジア地域に比べると遅かったという。^{1, 2)}

矢野はその理由を、蘭印は日本から遠く交通の便が悪かったこと、日本人に対する法的な扱いが悪かったこと、蘭印にまであえて行く背景にはシンガポールやマレー半島にすら住めない特殊事情があったか、シンガポールの経済活動が飽和状態になってはみ出した日本人が行くところだった、の四点を挙げている。³⁾

事実、明治時代(1912年以前)に、現在のインドネシアについて記された文献は、日本がインドネシアに関心を払うようになった1930～40年代に比べると著しく少ない。

蘭印の首都バタビアに日本領事館が開設されたのは1909(明治42)年で、1888年のフィリピン・マニラにおける領事館、89年のシンガポールの領事館、97年のタイ・バンコクの公使館の開設時期に比較しても、その開設は遅いといえる。

1902年、世界探検家を自称した中村直吉がこの地を訪れた。中村は1901年から6年余をかけて世界を放浪して歩いた人物で、朝鮮半島、中国を歩いた後、蘭印のジャワやスマトラを訪問した。⁴⁾

シンガポールを発った中村は、ジャワ島のスラバヤに上陸した。「スラバヤ(スラバヤ)、スマラン、至る所多少の日本人の居ない処はないが、而もその日本人が大抵いわゆる女郎屋の親方なるものである」。

バタビアでは吉阪寅吉の世話になり、スマトラ島のパレンバンでは、女郎屋の親方の林弘に出会った。

パレンバンから再度シンガポールに赴き、マ

レーシアのペナンを經由してスマトラ島北部の町デレ(デリー)に船で渡った。ペナンから乗った船には、呉服商の木村に婦女誘拐者が1名とこれに誘拐された婦人3名、それに中村を加えた日本人6名が乗船していた。

デレの人口は約1000名。「デレは一名メダンともいふ。日本人協会がある」。そのうち日本人は80～90名で、雑貨店が3軒あった。この地に住んでいる日本女性は、「例の醜業婦」だった。そのデレから20マイルほどの内地に煙草の耕作地があり、その持ち主の白人の妾となっている日本婦人が400人もいた。

中村が歩いたジャワの各都市やスマトラ南部のパレンバンにも、多数の日本人「醜業婦」が居住していたが、メダンやその近郊で際立ったのは白人男性の「妾」になっていた女性の姿だった。⁵⁾

第二次世界大戦以前に蘭印に在住した人々の会、ジャガタラ友の会が編集した『蘭印時代邦人の足跡 ジャガタラ閑話』は、蘭印時代の日本人の足跡を追った貴重な資料である。しかしその内容は、首都バタビアと商業の町スラバヤがあるジャワ島の記録が中心で、外領だったメダンの初期の日本人の足跡については触れられていない。

しかし、会の中心人物だった石居太楼は、メダンには日本の女性が多数住んでいたことがあったと言い、「メダンやジャカルタの古い墓地には、何れも明治十何年没、行年二十歳前後の女性の墓が多く、寂しく残っている」と、書いている。石居の筆は、異郷で倒れた日本女性の短かった人生の無念さを慮って優しい。⁶⁾

同会が編纂した『写真で綴る蘭印生活半世紀』にも、日本人の経済活動や日本人会などの写真などが多数収録されているが、メダンの初期の日本人社会についての写真はない。⁷⁾

3. 東南アジアで最も早く結成された 「スマトラ日本人会」

1902年にメダンを訪問した世界無銭旅行者の中村直吉は、この地に日本人協会があったと述べている。そのスマトラ日本人協会は、東南アジアで最も早く結成された日本人会だった。⁸⁾

スマトラ日本人会は、1932（昭和7）年8月に創立35周年を迎え、小冊子『スマトラ東海岸州地方在留民一覧』（108ページ）を刊行した。（図6）

1932年のスマトラ日本人会の会員は349名で、ほかには日本人会費を「負担せざる」「在留特別会員」と呼ばれる44名がいて、うち35名が女性だった。未入会者は男性のみ40名だった。これらの人々を含めるとメダン及びその周辺の在留邦人は、433名だった。（表1）

35周年を迎えたスマトラ日本人会は、日本領事館や南洋協会の商品陳列所などの「官」とゴム会社などの大企業が中心となっていた。

『一覧』には、メダンの日本人社会の発展史を記した「通俗在留民史 スマトラ日本人会を中心として」が、掲載されている。以下はその略史である。

メダンを含むスマトラ東海岸州に日本人がいつ頃から定着したのかははっきりしない。明治

22（1889）、3年ごろから、マラッカ海峡を渡ってきた娘子軍が港に上陸して牛車に乗ってメダンに來たという形跡がある。

最も古い林商店には、明治27（1894）年と書かれた物差しが残っている。その後、渋谷、小西などの商店が進出し、1897（明治30）年5月にこれらに勤務する店主・店員が、「日曜会」を結成した。

同年8月、男性3名、女性3名の委員が選出されて、会員55名の「成立会」が創立された。⁹⁾（筆者注：これが日本人会の始まりである）。

「成立」命名の由来は、当時の記録「日本人会創立記」に、「由来当地には破壊主義者の士多く、会合の円満に行はれること少なし。前途を祝して敢えて本会に成立の二字を呈せん」と記されている。

成立会の婦人部は、主として寄付金募集を担当し、男子部は日本人墓地の用地買収に奔走した。それまでは日本人が亡くなると、頭を下げて中国人南京墓地に埋葬させてもらっていた。ペチサ墓地購入直後、オランダ人に囲われていた女性が洪水に流されて水死し、初めてここに土饅頭の墓ができた。

1899年、日本国内の内地雑居の実施とともに、外国人の治外法権が撤廃された。この報を受け、支那の属国的冷視を受けていたメダン在住の日本人は、狂喜した。一方、欧米諸国との



図6. スマトラ日本人会創立35年記念誌
『スマトラ東海岸州地方在留民一覧』

表1. スマトラ北部の日本人会

名称	創立年	会員数	特別会員	非会員数	合計
スマトラ日本人会	1897	349	44	40	433
テピンテンギ日本人会	1928	58			58
シアンタル日本人会	1928	21		1	22
アサハン日本人会	1920	43		20	63
ピンゼイ日本人会	1929	18			18
バンカンランブランダン日本人会	1921	25		6	31
バカンバル日本人会	1928	32		1	33
アチエ日本人会	1914	32			32
		578	44	68	690

出典：スマトラ日本人会『スマトラ東海岸州地方在留民一覧』（1932年）

対等を意識して、「在島日本人申し合わせ風俗を^{みだ}紊さざるやう協議したるも充分の決議とのは」なかった。

1900年、「成立会」は、「スマトラ日本人協会」と改称した。

1904年、日露戦争が開戦すると、女性たちは競って寄付を申し出て、400ドルを日本軍に献金し、旅順が陥落すると大名行列を催して市内を練り回った。日本からの商品も飛ぶように売れだし、雑貨屋の渋谷、松崎商店などが勢力を伸ばした。

1909年にバタビアに領事館が開設されると、それまでシンガポール領事館の管下で過ごしてきた在留民も、小さな事までバタビア領事館に伺いを立てるようになった。対岸のマレー半島では、ゴムなどの栽培熱が盛んだったが、この地の在留民は無頓着でただ商売に専念した。

1911年、初めての大運動会をペチサ日本人墓地で開催した。

1913年、日本人墓地に六地藏を建立し、馬來のペナンから日本人僧を招いて開眼した。それまで「馬來の神さん」や「南京のほとけさん」を拝んでいた在留民は、生まれ故郷に帰ったような気持になった。

1915年、日本政府が中国に対華21カ条を要求したことを機に、メダン在住の中国人に日貨排斥運動が起こった。

1916年、メダンのブラワン港に、初めて日本船である大阪商船天智丸が入港し、在留民は感激しながら故郷を偲んだ。第一次世界大戦の開戦によりヨーロッパ製品の輸入が途絶え、その結果スマトラの邦商も息を吹き返し、昨日一介のルンペン商人も、何々商會を經營するようになった。

1918年、日本からスマトラ興業などがメダン周辺に進出してゴム園を買収し、アチェ方面にまで手を伸ばした。

1919年、本願寺から派遣されてきた山達北

陸師は数名の児童を集め、9月1日から小学教育を開始した。世界大戦中、好景気に酔った経済界は徐々に冷却しはじめ、全盛を極めていた「泡沫」商會は、いつの間にか姿を消した。

1921年、山達師の個人的事業で行っていた学校を、日本人協会の経営に移し、教員を増員するとともに初めて授業料を徴収した。この年、オランダ植民地政府は、財政難から戦時利得税を課した。そのため、多数の中国商店が倒産し、威勢を誇った澁谷商店もつぶれてしまった。

1924年、山達師の奔走でメダン本願寺が建立され、小学校を日本人協会の事務所から移した。バタビアの井田守三総領事が小学校を視察し、25年から教育費国庫補助金千円が下付されることになった。

1928年、メダンに日本領事館が開設され、諏訪務領事が着任した。日本人学校建設が発議され、在留民から寄付金を募った結果、8,235ギルダーが集まった。

1929年、スマトラ日本人協会はスマトラ日本人会と改称した。日本人学校建設計画に、日本政府から五千円の補助がおりにことになった。

1930年1月、在留民待望の新校舎は、閑静な一角にできあがった。

そして現在は、「満州事件発生以来、支那人のボイコットは既に一年におよび、世間の不景気はますます深刻であるが、在留民はなほ伝統の壮志を抱いて、いよいよ快活である」。

「からゆきさん」の時代から、雑貨店の時代、そして資金豊富な大企業進出の時代へと、国際情勢の激動と日本の近代化と発展に合わせるように、小さな日本人会も揺れて変貌している。初期の時代に登場する多数の女性の姿は、時代とともに日本人会の「正史」からは消え、その状況を把握することは難しい。

ペチサ日本人墓地の開設以来、多くの日本人がここに埋葬された。1913年には、すでにこ

の墓地に、二百有余の墓があったと伝えられている。しかし、多くの墓は土饅頭で朽ちれば消滅してしまう木製の卒塔婆だった。¹⁰⁾

1929年に開校したメダン日本人学校には、尋常小学校1年生から高等小学校2年生までの50名が学んだ。この数字に高等小学校の生徒が含まれているとはいえ、同年のスラバヤ小学校の児童数が38名、1931年のバタビア小学校の児童数が34名だったことを考えると、メダンの親たちが教育の充実を願った気持も理解される。¹¹⁾

在留邦人は、日本の大型船や軍艦が入港すると、飽きることなく船を眺めて、祖国の興隆を喜んだ。スマトラ在住日本人は、日露戦争の開戦に当たり、また日本国内での災害が発生した時には、義捐金を募って祖国に献金した。

『スマトラ東海岸州地方在留民一覧』は、その後メダンの日本人社会史を語るときには必ず引用され、羽生操の『椰子・光・珊瑚礁』、金子光邦の「蘭印における邦人発展史」（『蘭領印度叢書 下巻』に収録）、澁川環樹の『カメラとペン 蘭印踏破行』などで紹介されている。

4. メダンの日本人商店の発展

明治27（1894）年と書かれた物差しが残っていた林商店に続き、渋谷（98年）、小西の両店がメダンで営業を始めた。

1909年、その著『南国記』で南洋ブームを興すことになる竹越與三郎が、メダンを訪問した。

メダンはバタビア式の都会にして、最も多忙なる街路の外は公園より成り立ちと云ふべき清麗なる都会にして、停車場には不愉快なる人力車なくして、却ってドクカアに似たる馬車ありて客を待ち、街道には並木を植えて日光を遮り、家々戸々、電気燈によりて夜をてらすなど、生蜚の住居する山下に、此の如き好都会あらんとは何人も期待せざる処な

し。此地に於ては、日本商人は予か予期したるよりも多く、而して其の多くは成功者なるが如し。

南進論者の竹越にとって、メダンは想像以上の都会で、日本商人の活躍ぶりは意外だった。¹²⁾

1909年に開設された在バタビア日本領事館は、11年に打田庄六をスマトラ島に派遣した。打田は、スマトラ全島に在住する日本人は約600名、その内の三分の二が女性で、残りのうちのわずかの日本人が「正業」についていること、メダンには日本の美術品や雑貨を取り扱う渋谷商店や松崎商店をはじめ、十数戸の日本人商店があり、日本人協会と日本人墓地があることを、報告した。¹³⁾

外務省が各領事館に報告させた「海外日本実業者之調査」（1909（明治42年）12月末調査）には、バタビア領事館管内11名の日本人実業者が掲載され、そのうちメダンでは渋谷常五郎（渋谷商店）の名前があった。翌10年の調査では19名のうち、渋谷に加え松崎虎之助（松崎商店）、山崎敏之（林屋）、樋口寅雄（三木屋商会）の4名が掲載されている。¹⁴⁾ しかし、「調査」に掲載された実業家は、年間取引高が1万円以上などの条件があり、すべての邦商が網羅されていたわけではない。¹⁵⁾

打田と同じ年に、メダンを訪問した塩見平之助は、日本人社会の草分けは、美術商を始めた渋谷常五郎で、オランダ人が帰国の際に東洋美術品を購入していくと聞いている。その後、松崎、八木、山崎、竹内の美術・雑貨店が開店し、池田勇之進が薬品と美術品を扱っていた。写真業者には槇田と、藤崎の両店があり、樋口、山崎、松本の雑貨店も営業していた。「メダン市に遊ぶ世界の何人を宿泊せしむるに足る日本旅館「インディヤホテル」もあった。（図7）日本人協会は、メダンに本部を置きデリー州全体

を網羅していた。日本人協会の会長は槇田益雄が務め、協会は同胞間の親睦をはかることは勿論のこと、困窮者の救済、死亡者の始末を目的とした基本財産を積み立て、広大な日本人墓地を保有していた。¹⁶⁾

1911年、シンガポールで折りたたんだ一枚の大判のパンフレット『南洋便覧』が刊行された。そこには、シンガポールと馬來、香港の案内が記され、次いで、「明山市には日本雑貨店及日本旅舎等ありてその丁裁等は他州にある日本商店に比し優に遜色なし」と記されている。

『南洋便覧』には、日本郵船と、シンガポールが21店、蘭印のメダンが7店(渋谷商店、松崎公司(図8)、藤崎写真館、大和公司、槇

田写真館、三木屋商店、インデヤホテル)、香港が6店、馬來のクアラルンプールとペナンが各5店、イッポーの4店と、各地の日本企業や商店の広告写真が掲載されている。^{17) 18)} 蘭印の首都バタビアも、商業の街スラバヤも取り上げられず、唯一メダンだけが掲載されたことは、いかにメダンがシンガポールと強い関係で結ばれていたことが窺われる。

シンガポールで1913年に発行された写真集『南洋画報 第二巻』には、澁谷商会、旭写真館、三木屋商会、原島商店と日本ホテル(図9)、インデアホテル、松崎商店が掲載された。¹⁹⁾

1914(大正3年)、伊藤友治郎がペナンで刊行した『南洋群島写真画帖』に収録されたのは、



図7. インディアホテル

出典:『南洋画報 第二巻』(1913年:長崎県立図書館蔵)



図8. 松崎商店(公司)
出典:『南洋便覧』(1913年)



図9. 原島商店、日本ホテル(左)と原島貞吉
出典:『南洋画報 第二巻』(1913年:長崎県立図書館蔵)



図10. 大和公司
出典:『南洋群島写真画帖』(1914年)



図11. 戊辰商会

出典：『南洋群島写真画帖』（1914年）



図12. 三木屋商店と樋口寅雄

出典：『南洋群島写真画帖』（1914年）

表2. 明治末年（1912年）迄に開業したメダンの日本人経営商店・ホテル一覧

商店名	住所	創立年月		代表	業種・営業品目	出身地
はやし（林）商店	Huheubaeh	1894	明治27年	林松次郎 山崎敏之	雑貨・食品	伊勢桑名郡
塩入屋（入塩屋）	パッサル2号	1895	明治28年	金尾ミツ	ホテル	長崎市
澁谷商店	ヒューテンパーク	1898	明治31年	澁谷常五郎	美術・雑貨	豆州加茂郡 三阪村
松崎商店	ヒューテン20, 21, 23	1899	明治32年	松崎虎之助	美術・雑貨	長崎市
藤崎写真館	ケサワン138	1901	明治34年 3月28日	藤崎市郎太	写真	長崎市
戊辰商会（商店）	ヒューテンパーク	1905	明治38年	竹内計太郎	薬品・雑貨	香川県三富郡
原島商店	モスケ39, 41	1905	明治38年	原島貞吉	雑貨	福岡県筑後
池田勇之進	ケサワン	1905	明治38年	池田勇之進	薬種・雑貨	鹿児島県薩摩郡
日本ホテル	モスケ、ヲ・デマルク 角	1905	明治38年	原島貞吉	ホテル	
旭写真館	ヒューテンパーク	1907	明治40年 2月	槇田益雄	写真	京都府相楽郡
インデアホテル		1907	明治40年	志岐敬治	ホテル	長崎県南高来郡
おたまホテル		1907	明治40年	山川たま	ホテル	熊本県天草
グランドホテル	カントン119	1907	明治40年	松森市松	ホテル	長崎市
三木屋商会（商店）	ヒューテンバック8	1908	明治41年 1月1日	樋口寅雄	美術・雑貨食品	熊本市
山崎商店		1908	明治41年	山崎助	雑貨	大分県下毛郡
中島理髪店		1909	明治42年	中島兼吉	理髪	
生木歯科医院	モスケ1	1910	明治43年	生木久三郎	歯科医	大分県下毛郡
田中重之助	パサール 10	1910	明治43年 6月	田中重之助	売薬・化粧品	兵庫県川辺郡
宮口理髪店	パッサラマ12号	1911	明治44年	宮口竹三郎	理髪	長崎市

敷島ホテル(玉突き場)	シャンハイ	1912	明治45年	國松文次郎	ホテル	神戸市
田中薬房		1912	明治45年	國松文次郎	売薬	神戸市
小西商店		不詳	不詳	小西富三	雑貨	
K. Y. ASAHI	ヒューテンパーク	不詳	不詳	渡辺	写真	
大和商会 (大和公司)	ホーテルバック 42、44	不詳	不詳	八木暁	美術・雑貨	
御園商会		不詳	不詳	渋谷由之	食品	神戸市

伊藤友治郎『南洋年鑑 全四巻』等から作成

大和公司(図10)、戊辰商会(図11)、三木屋商店(図12)、松崎商店の4店だった。²⁰⁾

メダンの日本人実業家の活動の一部が判明するのは、伊藤友治郎が1916年～1920年までに4回発行した『南洋年鑑 附興信録』(以下『南洋年鑑』)によってである。

1916年に刊行された第一回『南洋年鑑』に掲載されたメダンの日本人商人は、旭写真館主榎田益雄、藤崎写真館主藤崎市郎太など20名で、榎田の広告には、創業年月、出身地と人物評が、また藤崎の広告には本人の写真と、創業年月日、出身地、住所、人物評が掲載されている。これらの南洋文献から見ると、明治期にメダンで営業活動を行った日本商人は上記表2のようになる。従来蘭印の日本人の経済活動と言えば、ジャワのスラバヤやスマラン、それに首都バタビアがその中心と思われてきたが、日本の企業の出先機関を持たなかったメダンでは、小資本の邦商だったにしろ、その活動は無視できないほど活発だったと言えるのである。

5. メダンの日本女性

メダン及びその近郊に日本人女性が多数在住していたことは、古くから広く知られた事実だった。²¹⁾

清水洋の「蘭領東印度におけるからゆきさんの研究—19世紀末から1930年代初めにかけて—」によれば、1887年にある日本人女性がタバコ会社のヨーロッパ人社員の女中になったの

が、この地域における「からゆきさん」の草分けだという。翌88年にはメダンで赤井某が娼家を開業した。その後タバコやゴムのプランテーションが発展するとともにシンガポールから日本人の「からゆきさん」が移動し、娼家も急増した。1894年には日本人経営の雑貨店も開店した。

清水が調べたオランダ植民地政府の1896年の統計によれば、蘭印全体で日本人在留者は463名で、そのうち女性が376名と全体の81.2%を占めていた。メダンの在留邦人は209名で、そのうち15軒の娼家に79名の娼婦がいた。ほかには92名の女中や女中頭がいたが、そのほとんどは、ヨーロッパ人の妾(洋妾)だったであろうと清水は推測する。²²⁾

1903年、オランダ人の Von Kol は、多数の売春婦が入院しているデリー病院を訪れた。彼がそこに見たのは、不潔な空気の中であえぐ、社会の犠牲者である中国人、日本人、ジャワ人女性の現実だった。病棟では、梅毒患者の横に死にそうなマラリア患者が横たわり、脚気患者、らい病患者などもいた。若いジャワ女性は床に腹這いになっていたが、その体は性病による潰瘍にむしばまれていた。²³⁾

1903年からフィリピンに居住し、06年から南洋を歩いた児玉音松は、メダンの日本女性と彼女らに寄生する日本人「情夫」についてこう

述べる。

スマトラ島のデレイの如きは旦那持ちの女（外妾）が金を持って居る事は実に非常なもので三四年前迄は日本男子を情夫にする為には五百円から千円位迄の手付を渡し、尚に月々六十円位宛の手当を出して平気で居た位である。されば此附近に移住してゐる日本移民中、故郷を距る時には満々たる凶南の勇志を抱いて此島に上陸した者も、忽ちの間に金と色とに心を腐らし、墮落の極に陥り、遂には堂々たる五尺の男子何等のなす所なくして誰吊ふ者なき異郷の骨と化す者の多いのは多く此娘子軍の為めである。実に慨嘆すべき事である。²⁴⁾

デレイ（メダン）周辺でヨーロッパ人の愛人になっていた日本女性たちは、ブラワン港に日本人の男性が到着すると、争って奪い合ったという話が広く流布していて、その様子は「メダンの男妾市」と表現された。児玉は、こうした女たちが勇志を抱いて渡南した男たちを墮落の道へ導いていると嘆いた。

蘭印生活の長かった伊藤圖南は、同地に勤務するオランダ人社員と日本女性の関係を次のように見た。

煙草栽培業のみならず本島（スマトラ島）在留の蘭人（一部略）が唯一の快樂として慰安を取る者は酒と婦人のみ。彼等認知に到着すれば直ちに本島の婦人或は支那或は日本等の婦女子を人気の年限中相当の金額にて雇傭し、蓄妾すと雖も任期充つれば弊履の如く解雇するを常とす。亦此等蓄妾も彼等が任期中に相当の蓄財をなすが如く、又た相当の懷囊充たし各自目的の業を営むに至る。日本婦人の如きは本島より年年日本へ送金する金額決

して尠少にあらざるなり。²⁵⁾

日本婦人は、オランダ人と愛人契約を結び、契約終了後は事業を始めたりする者もあらわれた。彼女たちの日本へ送金する額は決して少なくはなかった。彼女たちは故郷へ送金するだけでなく、日本人墓地購入費用を負担し、日本で災害が発生した際には、率先して献金している。

スマトラ日本人会35周年記念誌の「通俗在留民史 スマトラ日本人会を中心として」が触れたように、日露戦争が勃発したときには、日本人協会（竹内計太郎会頭）から金400円と、メダンを中心にした在留邦人252名から2366円が、陸軍・海軍に恤兵寄付されたが、この献金者の内200名以上が女性（1円～30円）だった²⁶⁾。

多くのからゆきさんが生まれ育った長崎県島原の僧侶広田言証は、1906年にインド巡礼を思い立ち、行く先々で亡くなった女性たちを弔った。島原の大師堂に残る、メダン近郊の町ランカツ（タンジュンプーラ）で行われた施餓鬼の写真では、まだ幼な顔の少女を含め18名の女性が、先人のために祈りをささげている。言証師は「からゆきさん」を弔うために、1910年に天女塔を建設した。堂の周りを囲む石の玉垣には、192名の寄進者の名前が刻まれ、そのうち、海外からの寄進者は132名で、14名は蘭印の在住者だった。倉田によれば、そのすべてはメダン近郊の町、ビンジャイなどからだった。²⁷⁾

蘭印では、1909年に向こう3年間の間に娼婦を一掃せよとの命令がくだされ 1912年に廃娼が宣言された。その結果ジャワでは日本人娼婦は姿を消したが、規制の弱かった外領では、メダンをはじめ女性たちが生きながらえていた。²⁸⁾

主人の毛唐と一緒に、田舎から自動車で意気揚々とやって来る。化粧品等買い込んで帰る。だから口入屋は多く雑貨店や小間物屋兼業をしてポロイ金儲をやる。

10年ほど前までは、口入屋が斡旋する男妾の入札があり、相場は三四百円から千円位までだった。さすがに今日ではなくなったが、今でも男妾は存在する。稼いだ金をすべて男につぎこんで、悲惨な末路に向かう洋妾もいる。

メダンの夕方海風徐に涼を送る時、公園には例の洋妾が散歩する。彼方此方のベンチに腰掛けた日本の男が、姉様、活動に連れてかんのうし、ヘイ来まっせ兄様、こうした怱した会話が今でも交はされる。実にメダンは女護島である。³¹⁾

メダンには、女性を食い物にしたゴロツキや悪漢の日本人もいたのである。

メダン及びその近郊に在住した日本女性は、いずれの資料から視ても、無視できないほど大きな存在だった。

『南洋年鑑』全4巻には、メダンで女性が経営するホテルの広告がいくつか掲載されていて、第一回版(1916年)には、山川たまの「お

たまホテル」が写真入り広告で紹介されている。(図14)

たま子は、数多の誘惑にも負けず、一人敢然として自立し、自らの名前を付したホテルを経営している。そして、大正天皇の御大典を祝ってメダンで開催された祝賀会(1915年11月10日)に二百円を寄付した。スマトラ日本人協会は、こうした資金で祝賀のために長さ三十間の最大級仕掛け花火や、打ち上げ花火数十本を日本橋の花火業者に注文している。³²⁾

同年鑑には、入塩屋を経営する金尾ミツも広告を出し、林田ワカの長崎屋、大塚モモヨの「スラバヤホテル」、松下かどの「おかどホテル」、長門いねの「おいねホテル」、谷口たつの「おたつホテル」の名前も見える。³³⁾

第二回版(1918年刊)には、女性経営のホテルは11に増えたが、たま子の名前は消えていた。第三回版(1919年)では7名に減少したものの、第四回版(1920年)には19名の女性ホテル経営者の名前が挙がっている。これらのホテルの多くは、旅行者松尾が語った、女性を抱えた「曖昧屋」だった。

日本女性の海外での活動を各種旅行記から取りまとめた宮岡謙二の『娼婦海外放浪記 もうひとつの明治』は、メダンを「洋妾の街メダン」、スマトラ島を「女護ガ島」と表現し、メダンの日本女性の状況について揶揄しながら詳述しているが、出典は明記されていない。³³⁾

6. 渋谷商店の渋谷常五郎

メダンの日本人商店は、日本女性の増加に伴って発展してきたと言ってよい。その中で、メダンを訪問した日本人の記録や領事館の報告に必ず登場するのが、1898(明治31)年創業の渋谷常五郎の渋谷商店である。(図15)

渋谷は、豆州(静岡県)賀茂郡三阪村に生まれた。「日清戦争の機運に駆られ薄資を提げ敢



図14. おたまホテルの山川たま
出典:『南洋年鑑 附興信録』(1916年)

然として明山(メダン)市に雑貨店を開いた。当時メダンでは、林商店と小西商店が声明と資力とを擁し、信望を集めて堂々の陣営を張っていた。しかし、渋谷は少ない資本にもかかわらず、ひとり「突撃奮戦」した結果、小西は帰国を余儀なくされ、林商店も「亡者の群に入り」、渋谷の一人勝ちとなった。シンガポールで日本語新聞『南洋新報』を刊行していた福田天心は、渋谷の出身地近くの天城山と、相模灘に例え、人柄をこう評した。

氏の士気や天空を摩するの概あり。氏の性や澎湃たる相模灘の威あり。其言論や奇警、其行動や磊々たり。

渋谷の努力は実り、今や政庁や外人からの信

望も厚く、又多年同胞公共のために尽くした結果、巨万の財を擁するようになったが、これも偶然のことではない、と福田は続ける。

資本が少なかった渋谷は、先行商店の小西商店、林商店を蹴散らし、福田が絶賛するほどの地位を築き上げたが、その過程には相当の困難を伴うとともに、他店を圧倒する彼の行動力があつた。(図16)

1904年、日露戦争が勃発し、メダンを中心に在留邦人が陸軍・海軍に2366円を恤兵献金した時、渋谷は、その世話人である6名の代表の筆頭を務め、もう一人の代表飯田忠吉と並んで最高額の100円を寄付している。ほかの代表4名は、松崎虎之助(50円)、武内計太郎(50円)、山崎敏之(30円)、槇田益雄(30円)だった³⁵⁾。翌年1月、旅順が陥落した時には、在留民は祝勝大名行列を催し、終日メダンを練って回った。大名に扮したのは渋谷で、先頭の奴は林商店の山崎敏之、世話役を務めたのが松崎虎之助だった³⁶⁾。

1911(明治44)年にメダンを訪れたバタビア日本領事館の打田は、ジャワ島の日本女性は洋風やインドネシア風の服装に慣れ親しんでいるが、メダン周辺に在住する数百名の日本女性たちは日本式(和服)の服装を守り通していたことを記している。³⁷⁾

本稿冒頭で紹介した「古写真」の日本女性たちも、そのほとんどが和服姿だったし、1902年に中村直吉がペナンからメダン渡った時には呉服屋が乗船していた。メダンの日本商店は、女性たちが必要な日用雑貨に加え、呉服や化粧品などを扱っていた。

1937年に南洋及日本人社が刊行した『シンガポールを中心に同胞活躍 南洋の五十年』には、日露戦争前後の南洋地域における「花街の全盛時代」で、メダンの女性たちに触れている。

殊にメダンの煙草園が栄え石油坑が続々開



図15. 渋谷商店
出典:『南洋画報 第二巻』(1913年:長崎県立図書館蔵)



図16. 渋谷常五郎
出典:『南洋画報 第二巻』(1913年:長崎県立図書館蔵)

発された当時の景気と云ったら、実に素晴らしいものだった。ロマテン氏の繁昌のみならず、若い白人に仕切られる彼の一带に所謂且那持ちが瞬く内に千人を突破したのである。それらを顧客とするメダン在留邦商の鼻息と云つたらなかったのだ。だから女郎と云つても馬鹿にはされない。³⁸⁾

少ない資本からメダンの邦商の代表格にのし上がった渋谷常五郎も、日本女性を相手に雑貨店を営業し、こうして次第に力をつけていった。

しかし、後にスマトラ興業メダン現地支配人を務めた岩田喜雄は、若かりし頃（1914、5年ころ）、メダンを訪れて驚くべき光景を目にしていた。日本人女性たちが「おおっぴらに売られていた」のである。それは渋谷常五郎のもう一つの顔だった。

渋谷商店なんかは、日用雑貨だけでなく、女の仲買いもやって儲けていたんだねえ。毎週日曜日には自分の店の前に日本人の女だけを五人、十人と並べて競売に付すんだ。買いに来るのはみんな女郎屋のおやじなんだが、これに通りがかりの者もよってたかって、人だかりは大変なものだった。

これは、岩田が回顧録を作成したときに編者に語った内容だが、売られた女性の素性は、多くが「商品」として香港、シンガポールで売り手買い手の値段の交渉が成立しなかった者や、

オランダ人などの白人に囲われて契約期間が切れたり、本国から妻が来たためお役御免になったりした女性たちだったという。³⁹⁾

シンガポールやバタビアなどの国際港とは異なり、メダンを経由したり、わざわざメダンを訪問したりする日本人の知識人は少なかった。そのため渋谷が「正業」を装いつつ、このように女性の競りを行っても、地元メダンではともかく、遠い日本に伝わることはなかった。

渋谷商店は、その後も事業を拡大し、1915年には美術雑貨、日用雑貨、セメント、麦酒、護謨茶箱、護謨受器其など農園用具の販売を手掛けるほか、東京大平保険会社のスマトラ代理店、アサヒビールのスマトラ東海岸特約店などになっていた。⁴⁰⁾

1918年には日本人の従業員14名を抱えて250万盾（ギルダー）の売り上げを誇った。渋谷に次いで取引高が多かったのは松崎商店と日蘇貿易会社の8万盾で、林商店と大和公司はともに5万盾、三木屋商会と原島商店は2万盾と、渋谷の一人勝ちの状況だった。（表3）1920年に刊行された『南洋総覧』の在留企業名鑑には、直輸入業者として一頁の広告を出し、森永製菓のスマトラ代理店にもなっている。⁴¹⁾

しかし、オランダ現地政府が課した戦時利得税の支払いに耐えられず、1921年に渋谷商店は倒産し、三十数年の歴史に幕を閉じた。⁴²⁾ 渋谷常五郎は成立会創立委員の一人であり、六代目スマトラ日本人協会会長を務めるなど、在留法人の福利厚生にも努めている。（表3）

表3. 外務省「海外日本実業者之調査」からみるメダンの有力日本実業家

西暦	和暦	営業主、支配人 若しくは主任	称 号	本籍地名	英業種別	資 本	取引高・製造 漁獲高	使用人 日：日本人 土：土人
1910	明治43	渋谷常五郎	渋谷	静岡県	本邦雑貨輸入	6万円	6万円	4
		松崎虎之助	松崎商店	長崎	本邦雑貨輸入	3万5千盾	6万9千盾	
		山崎敏之	林屋	三重県	雑貨及食料品	7千盾	1万6千5 百盾	

		樋口寅雄	三木屋商会	熊本県	雑貨販売	8千円	1万8千百円	
1913	大正2	澁谷常五郎	澁谷商会	静岡県	本邦美術品及雑貨	7万円	6万8千円	6
		松崎虎之助	松崎商店	長崎県	本邦美術品及雑貨	3万5千盾	5万5千盾	
		澁谷由之	御園商会	神戸市	食料品	5千盾	2万7千盾	2
		樋口寅雄	三木屋商会	熊本県	雑貨、食料	1万2千円	1万9千5百円	4
		八木暁	大和公司	東京	日本美術品及雑貨	1万盾	4万盾	3
		山崎敏三(之)	林商店	三重県	雑貨、食料	5千円	1万2千盾	1
		田中重之助	田中大薬房	兵庫県	売薬及化粧品卸	4千盾	1万千盾	1
1918	大正7	澁谷常五郎	澁谷商会	静岡県	直輸出入仲買雑貨小売	25万盾	250万盾	日14
		原島貞吉	原島商店	福岡県	農具機械並下宿業	1万盾	2万盾	日2、土4
		國松文次郎	田中薬房	兵庫県	陶磁器、硝子器、医療機械	2万5千盾	3万8千盾	日2、土1
		柿本茂	柿本商店	福岡県	陶磁器、硝子紙類	1万盾	3万盾	日2
		八木暁	大和公司	東京市	雑貨	2万盾	5万盾	日3、土1
		柴田十郎	御園商会	福岡県	食料品、綿布、雑貨	6千盾	2万盾	日1、土3
		山崎敏之	はやし	三重県	食料品、綿製品、雑貨	7千盾	2万盾	日2、土3
		竹内計太郎	日蘇貿易会社		輸出入貿易	10万盾	8万盾	日3、土1
		松崎虎之助	松崎商店	長野県	家具、雑貨、花筵	3万5千盾	8万盾	日6、土2
		樋口寅雄	三木屋商会	熊本市	綿布、雑貨、食料品	4万盾	2万盾	日3、土2
		鮫島香	薩摩洋行	鹿児島県	雑貨	不詳	4万盾	土1
		原田廣五郎	大正薬房	香川県	薬品、化粧品、写真材料	1万盾	1万4千盾	日1、土2
1921	大正10	八木和三郎	やまと商会	新潟県	雑貨	2万5千盾	5万盾	日2、土2
		國治(松)文次郎	田中商会陶器部	兵庫県	磁器、陶器、綿布、雑貨	1万5千盾	3万5千盾	日2、土2
		竹内計太郎	戊申(辰)商会	香川県	薬種、医療機械	10万盾	9万盾	
		山崎敏之	はやし商店	三重県	雑貨、食料品	7千5百盾	7万5千盾	日2、土2
		松崎虎之助	松崎商店	長崎県	雑貨	3万盾	18万盾	日4、土2
		原島貞吉	原島商店	福岡県	農具並ホテル	1万4千盾	1万9千盾	日2、土3
		樋口虎(寅)雄	三木屋商会	熊本県	雑貨、陶器、綿布、食料品	3万盾	3万盾	日11、土2

外務省通商局編『海外日本実業者の調査』(復刻版 不二出版 2006/7) から抜粋して作成

7. メダンの生き字引、槇田益雄

スマトラ島のメダンにおけるもう一人の日本人の草分けは、1896（明治29）年にこの地に住み着いた槇田益雄である。（図17）

槇田益雄は、京都府相楽郡大河原村大字北大河原130番戸に生まれ、滋賀県商業学校に入学した。同校は、宇野宗佑元首相や伊藤忠商事社長伊藤忠兵衛（二代）等の人物を輩出し、第二次世界大戦前は実業家の育成学校として広く全国に知られた学校だった（現在の滋賀県立八幡商業高校）。

1892（明治25）年10月8日、槇田は第8期生として同校を卒業した。近江商人の伝統を継ぎながら新しい時代に対応するために設立された同校には、一期生からの卒業証書台帳が保存されていて、槇田の卒業時の年齢が18年10ヵ月と判明する。槇田の誕生は1874（明治7）年1月ころだった。⁴³⁾

商業学校を卒業した後のことは不明だが、1895（明治28）年に自由民権家の大井憲太郎が南洋貿易を志し、シンガポールに中国人李綠雲と共同経営で大井商店を設立した際、21歳

で大井に同行して同地に渡っている。

しかし、事業はうまくいかず、大井はシンガポールを去った。残された槇田は南洋に残ることを決め、96年9月に蘭印のメダンに向かった。⁴⁴⁾

槇田はメダンに到着した後、放浪生活を数年送っている。その後、メダンで成功していた竹内計太郎と組んで事業を開始し、1905（明治38）年に雑貨店を開店することができた。竹内は香川県三富郡の出身で、同年に薬品販売店戊辰商会をメダンに設立している。（図11参照）

このころ、大井が連れてきた壮士のもう一人がメダンに到来した。17歳にしてシンガポールに渡った八木暁だった。八木は大井商店の閉店後、中野光三の経営する中野医院の事務員となり、その後米屋商会に入り21歳で支配人になった。06年、八木はわずかの資本を携えてメダンに移動し、大和公司を設立している。（図10参照）⁴⁵⁾

一方槇田は、雑貨店を経営する傍ら洋服裁縫店を開き、十数名の店員を使用するほど店は繁盛した。しかし主任として任せていた男のために多額の損害を被った結果、閉店を余儀なくされてしまった。

06年、再び竹内と組んで再起を図るがこれもうまくいかず、07（明治40）年に渡辺という日本人が経営していた写真館を譲り受けて、旭写真館と命名した。

渡辺については不詳だが、1906年に投函された図18の絵葉書は、MedanのKy Asahiが撮影し、J. Hallermannが発行したものである。槇田は、既に知名度があったAsahi写真館の名前からKyを省いて継承したのだろう。

旭写真館は藤崎写真館が位置する繁華街ケサワン通りと交差するヒューテンパーク通りにあり、この通りには渋谷商店、松崎商店、三木屋商会、大和公司、戊辰商会などが店を構え、あたかも「日本人街」の様相を呈していた。⁴⁶⁾ Ky Asahiの絵葉書はヒューテンパーク通りを撮影



図17. 槇田益雄と旭写真館
出典：『南洋画報 第二巻』（1913年：長崎県立図書館蔵）

したものだが、通りの右手に K. Y. Asahi と T. Matsuzaki (図18参照) の看板が見える。

しかし、商業学校卒業生である榎田の志は事業の成功であり、写真館の経営ではなかった。その気持ちを福田は、「龍攘虎闘の風雲を捲き起こさんとして奮闘悪戦以て今日に至れりと雖も、壮心何んぞ禁ぜん空しく志を抱いて天の一方を睨するのみ」と結んでいる。

榎田は、1911年ころから1918年ころまで日本人協会会長を務めた。1919年に南洋協会台湾支部が発行した『南洋渡航須知』は、スマトラ日本人協会の活動とそのトップである榎田の人望を次のように伝えた。

南洋各地日本人会中もっとも完備し、会員相互一致団結最も鞏固也と称せらるるは、スマトラ日本人会にして和蘭政府は、日本人に対する警察事務の一部を託し、バタビア日本領事館はスマトラ東海岸州に於ける一般事務を委託し居れり。現在会員数四百八十名にして、会頭は榎田益雄とす。同氏は、温厚篤実、威徳並び行わるる好紳士にして内外共に氏に対する信用極めて厚し。⁴⁷⁾

しかし、第三回『南洋年鑑』(1919年刊)には、スマトラ日本人会会長の欄に榎田の名前はなかった。旭写真館は田中薬房の国松文二(治)郎に買収されて旭商会(Asahi & Co)となり、そ

の責任者は磯村勝になっていた。榎田の成功への夢は再び破れたのである。⁴⁸⁾

その後、榎田はメダンの日本人社会の生き字引として過ごした。1940年に読売新聞記者渋谷環樹がメダンを訪問した時には、東洋商会の会計係を務め、往時の出来事を渋谷に語っている。⁴⁹⁾

東海岸州在留の日本人は、メダンを中心にして結束力が強かった。メダンに日本領事館が開設される1928年までは、在バタビア日本総領事館から一般事務を委託されていた。各種刊行物に、在留日本人の詳細な活動情報を外部に提供しているのは、スマトラ日本人会が一番だった。州内の各地日本人会と連携を取り、その情報収集の中心として活動したのは、旭写真館の主でスマトラ日本人協会会長であった榎田益雄に他ならない。

8. 古写真を撮影した写真師

すでに見てきたように、最初に紹介した古い10枚の写真を撮影したのは、明治末期からメダンで開業していた榎田益雄の旭写真館と藤崎市郎太の藤崎写真館だった。

撮影された女性たちは、この地に在留していた日本人女性だと言える。1917年の東海岸州の在住していた外妾は283名だった事は前述したが、そのうち子どもを持っていた女性は何人かいて、男の子3名、女の子3名が記録されている。⁵⁰⁾



図18. Ky Asahi 撮影の絵葉書(1906年の消印がある)
右は拡大写真(旭写真館と松崎商店の看板が見える)

1912年12月の在バタビア日本領事の報告では、メダンに写真業者が10名いた。しかし、メダンを訪問した日本人の記録にその名が記されているのは、藤崎と楨田だけである。

それでは、メダンのもう一人の有力写真師だった藤崎市郎太はどのような人生を送ったのだろうか。

海外の個人商店がいつ創業し、いつ撤退したのかを把握することは、極めて困難な作業である。彼等は、経済の変動を素早く把握し、「転々としている」と表現した方が適切なほど移動する。

しかし、色々な文献にあたってみると、おぼろげながら外輪だけでも判明することがある。

藤崎市郎太は、長崎市西山に生まれた。1901（明治34）年に渡南し、シンガポールとメダン（同年3月28日創業）に写真館を開いた。その後シンガポールの店をたたみ、メダンに腰を据えた。1911年、藤崎写真館があったシンガポールの住所では、西洋料理と旅館を営む都ホテルが営業していた。⁵¹⁾ 本稿冒頭で紹介した図2、3の女性の写真には、藤崎のシンガポールの住所が印刷され、メダンの住所はスタンプで押されていた。それ故、この写真が撮影されたのは、遅くとも1911年ころまでだったと判断してもよいだろう。

『南洋画報 第二巻』に収録されたメダンの

写真は、藤崎と楨田の手によるものだが、『画報』に登場する藤崎本人は、フロックコートに身を包み、ハットを右手に持つおしゃれな姿であって、店舗の写真はない。（図19）

伊藤友治郎は、藤崎を「君や年齒盛んにして意思の人たる、前途の進境や知るべき也」と評した。

藤崎は、K.Y. Asahi と同様にスマトラの人々と風景を写した絵葉書を I. Fujisaki & Co. の名前で作成し、販売した。（図20）しかし、藤崎市郎太の名前は、旭写真館が倒産した1919年に同じように消え、館主は藤崎末五郎に替っていた。⁵²⁾ 末五郎の原籍が市郎太と同じ長崎市西山であることから、末五郎は市郎太の身内だったのだろうが、その後藤崎写真館の名前を各種資料に見出すことはできない。

藤崎市郎太の藤崎写真館は、1901年から、そして楨田益雄の旭写真館は1907年から、ともに1919年ころまでメダンで営業したのである。

9. おわりに

メダンの日本人社会は、1909年に在バタビア日本領事館の所管地域になるまで、シンガポールとの関係が強かった。同じ蘭領とはいえ、1500km も離れたバタビアとはほとんど無縁な状態であった。所管地域になった後ですら、領



図19. 藤崎市郎太

出典：『南洋画報 第二巻』（1913年：長崎県立図書館蔵）



図20. I. Fujisaki 作成の絵葉書
シベラヤの女性

事がバタビアを訪れた形跡はほとんどない。そのため在留邦人たちは、内紛を抱えつつも早い段階からお互いの福利厚生のために、東南アジアで初めての日本人会(成立会)を設立し、日本人墓地の維持や児童教育にあたった。

当初は女性が大半を占めたスマトラ日本人協会も、日本から新たに到来した企業や商人の参加により、その構成や役割が劇的に変化した。1920年にシンガポールで刊行された『南洋総覧』は、各地の日本人会の紹介の中で、スマトラ日本人協会に最もページを割いて、その変貌ぶりを伝えた。

此地往年新嘉坡(シンガポール)に次げる邦人醜業者の大魔窟として指弾され、邦人商店は洋妾のお里にして、彼らがお里帰りの節は、男妾の市が建つとまでに書き立てしものありしが、今はさる淫風なく殊に近時官憲の取締り嚴重なると、在住邦人雪辱的の弾力とに因り、旧市街に於ては殆ど醜業婦の影を認めず、尤も市の新地ルマテングには、ホテルてふ看板の下に、土人及支那人等に醜業を稼がしむる邦人等の一区廓を存ずれども、こは何れも地方農園数万の国違労働者の、要求を満たすべく設けられたる別世界にして、全然市民とは没交渉なり。⁵³⁾

外国人の愛人になった女性たちが、メダン及び近郊に相当数居住していたことは各種文献から確認できるが、その具体的な場所や人数、彼女たちの生活ぶりや想いを伝えるものはほとんど残されていない。たまにその姿が描かれていても、興味半分か揶揄したものである。本稿で引用した文献もその傾向が強い。

1935年にスマトラを旅行した金子光邦は、メダンの北方の町イデーで、中国系の妻となり、雑貨店を経営していた夫に先立たれたものの、二人の子供に恵まれて幸せに暮らしている佐賀

県出身の老女の姿を描いているが、こうした人が多かったことを祈りたい。⁵⁴⁾

本稿では勇志を抱いて図(渡)南した対照的な二人の日本人、渋谷常五郎と榎田益雄を取り上げた。南洋に熱い思いを抱いてきた日本人の青年も、渋谷や榎田のように一度でも成功すれば上出来で、一獲千金を夢見た多くは、夢破れて老いていく。

1932年に刊行された『スマトラ東海岸州地方在留民一覧』に掲載された、日本人会費を「負担せざる」「在留特別会員」や非会員の多くは、こうした女や男たちの後日の姿だったのだろう。

ペチサ日本人墓地は、今は市街地となっている。戦後新たに設けられたデリー・トゥア日本人墓地は、メダンの中心から南に車で小一時間行ったところにあり、筆者は2010年3月、元残留兵を父に持ち中国系の母との間で生まれたLさんの案内でこの墓地を訪れた。整然とした敷地には5地蔵が鎮座しているが、これは1913年に開眼された6地蔵の内だろうか。

墓地に眠っているのは、多くが第二次世界大戦に関わった戦死者である。それ以外の人々に埋葬者名簿に掲載されているのは54名に過ぎない。死亡日が記された人の中で最も古い人は1899年4月28日に亡くなった福山ヨシ子という女性である。名簿が作成された1992年当時で、氏名が不明な埋葬者は225名に上るといふ。⁵⁵⁾

在留邦人の念願がかなって設立されたメダン日本人学校は、第二次世界大戦の激化に伴い廃止された。戦後に復活したものの、児童数の減少により1998年3月に再び閉校されている。⁵⁶⁾

その昔、藤崎写真館があったケサワン通りは、今も交通量の多い繁華街に位置する。近くには20世紀初頭に建てられた中国系貿易商の家が博物館になって往時の生活を偲ばせる。通りの骨董屋には古びた日本人形や、VOC(オラン

ダ東インド会社)のマークの入ったコンプラ瓶や大皿が売られている。筆者の訪れた骨董屋の主人は、この地にかつて日本人が多数在住していたことを知っていたが、それは軍政期の日本人たちのことだった。

『大東亜戦争とインドネシアー日本の軍政』の著者加藤裕のブログには、メダン近くのセルダンで最後のスルタンとなった、スレイマン・ジャリフ・アラムシャが、1898年に新婚旅行で日本を訪れ、極秘に明治天皇に出会ったことが記されている。⁵⁷⁾ 98年と言えば、日本人会(成立会)が創設され、日本人墓地の土地が入手されたところである。

インドネシアでも、蘭印時代の在留邦人の研究が始まっている。メタ・スカール・プジラストゥティは、”Apakah Mereka Mata-Mata ?”(彼らはスパイだったのか:1868年から1942年までのインドネシアの日本人たち)を2008年に刊行し、倉沢愛子が解説している。⁵⁸⁾

本稿には、現在では差別用語とされる用語が頻出するが、歴史資料としてあえてそのまま使用した。

【注】

- 1) 矢野暢『「南進」の系譜』中公新書 1975年
- 2) 矢野暢『日本の南洋史観』中公新書 1979年
1.2を合わせた復刊『「南進の系譜 日本の南洋史観」 千倉書房 2009年
- 3) 前掲矢野暢『「南進」の系譜』P.18-19
- 4) 中村直吉については、小著『アフリカに渡った日本人』(時事通信社 1993年)の「忘れられた世界無銭旅行家中村直吉」を参照願いたい。
- 5) 中村直吉『五大州探検記 第二巻 南洋印度奇観』博文館 1909年P.94-112
- 6) 石居太桜「ジャワ邦人草分け物語(明治時代)」ジャガタラ友の会編『増補改訂版 蘭印時代邦人の足跡』1978年
- 7) ジャガタラ友の会編『写真で綴る蘭印生活半世紀 戦前期インドネシアの日本人社会』1987年
- 8) 橋谷弘「東南アジアにおける日本人会と日本人商業会議所」(波形昭一編著『近代アジアの日本人経済団体』所収 同文館 1997年)、南洋協会編『在南洋邦人団体便覧 復刻版』大空社 2004年(原著は1937年刊)
- 9) 成立会創立委員長は林松次郎、委員は金子長蔵、武内計太郎、渋谷常五郎、元村こと、小西やく、鹿野きくの6名だった。林松次郎については、1897年10月4日付『読売新聞』に、林がスマトラ視察のために出発したとの記述がある。
- 10) 福田天心『南洋画報 第二巻』南洋画報社 1913年(長崎県立図書館蔵)
- 11) 小島勝『日本人学校の研究』玉川大学出版部 1999年P.88
- 12) 竹越與三郎『南国記』二西社 1910年 P.122
- 13) 『打田庄六「スマトラ島」視察復命書』外務省「移民調査報告書 第八」に所収 1911年 復刻版 雄松堂 1985年
- 14) 外務省「海外実業者之調査」『海外日本実業者の調査 復刻版』不二出版 2006年
- 15) 高嶋雅明「海外実業者の調査」解説『海外日本実業者の調査 復刻版』第一巻 P.3 不二出版 2006年
- 16) 塩見平之助『南洋発展』大来社 1912年P.200-202(国会図書館蔵)P.200-202
- 17) 『南洋便覧』の裏面の地図と企業・商店の広告は、シンガポール日本人会が刊行した『戦前シンガポールの日本人社会 写真と記録』(1998年、改訂版2004年)の表紙の内側に縮小して掲載されている。
- 18) 澁谷政雄『南洋便覧』南洋便覧編纂所 1911年
- 19) 前掲福田『南洋画報 第二巻』
- 20) 伊藤友治郎『南洋群島写真画帖』南洋調査会(ペナン 印刷は東京)1914年
- 21) 『村岡伊平治自伝』(南方社 1960年)によれば、女衞だった村岡は1890年にメーザン(メダンのことと思われる)村を訪問し、メーザンには、おかよ婆さんの女郎屋(女10人)があり、その女たちは身体に障害を持った人ばかりである。そうした女が500名から800名もいて煙草栽培のオランダ人の愛人になっている。資本金千円程度の日本商店が二軒あり、若い者が30名ずついる、と記録している。村岡の自伝については、山崎朋子、矢野暢、清水洋らによりその信憑性は否定されている。ここでは参考情報として記載する。
- 22) 清水洋「蘭領東インドにおけるからゆきさんの研究ー19世紀末から1930年代初めにかけてー」名古屋商科大学論集 Vol.38-1 1993年
- 23) Ann Laura Stoler “Capitalism and Confrontation in Sumatra's Plantation Belt, 1870-1979” Yale University Press, 1985 P.32 (Kol, Van H “Uit onze kolonien” Leide:van Hoeve, 1903からの引用)
- 24) 児玉音松『南洋』先華堂 1910年 P.180
- 25) 伊藤圖南『南洋之大富源 全』伊藤商会 1910年

- 「蘭領植民地」P.27-28
- 26) 「日露戦役二際シ恤兵金献納雑件／欧州其他ノ部 第一巻 11 在新嘉坡領事館／分割1」1904年3月25日付在新嘉坡領事館外務大臣宛公信 JACAR (アジア歴史資料センター) B07090986400 (外務省外交史料館史料B-5-2-10-0-4_1_0_01)
- 27) 倉橋正直『島原のからゆきさん 奇僧広田言証と大師堂』共栄書房 1993年 施餓鬼の写真は口絵、P.213-224
- 28) 村井良忠「戦前期オランダ領東インドにおける邦人経済進出の形態 ―職業別人口調査を中心として」『アジア経済』第26巻第3号 1985年
- 29) 外務省外交史料館史料 海外在留邦人本邦人職業別人口調査一件 7-1-5-4
- 30) 佃光治(的外)『南洋の五年』南洋及日本人社(シンガポール) 1919年 P.480-481
- 31) 松尾末蔵『南洋シベリア 無銭探険拾萬哩』泰山房 1918年 P.61-67 なお、このころには探検家と称した日本人が世界を放浪していて、第二回『南洋年鑑』に掲載された、1916年における「邦人旅行者の東海岸州去来一覧」には、無銭旅行者2名が同州を来訪したことが記されている。また、それより前の1913年には菅野力夫もメダンを訪問している。若林純『謎の探検家 菅野力夫』青弓社 2010年 P.40
- 32) 1915年9月5日付『読売新聞』
- 33) 伊藤友治郎『南洋年鑑 附興信録』南洋調査会出版部1916年(復刻版 龍溪書舎 2011年)
- 34) 宮岡謙二『娼婦 海外放浪記 もうひとつの明治』三一新書 1968年 P.145-148、P.157-163
- 35) 前掲「日露戦役二際シ恤兵金献納雑件／欧州其他ノ部 第一巻11 在新嘉坡領事館／分割1」献金リストには、成立会創立時の6名の委員の内、委員長林松次郎、金子長蔵、小西やく、鹿野きくの名前はなく、渋谷と元村こと(10円)だけが記載されている。
- 36) 「通俗在留民史 スマトラ日本人会を中心として」『スマトラ東海岸州地方在留民一覧』1932年
- 37) 前掲打田『「スマトラ島」視察復命書』
- 38) 『シンガポールを中心に同胞活躍 南洋の五十年』南洋及日本人社(シンガポール 印刷は東京) 1937年 P.160-161
- 39) 小林一彦・野中正孝『ジョホール河畔 岩田喜雄南方録』アジア出版 1985年 P.271
- 40) 御崎寒二郎『馬來半島及南洋諸島』大日本海外発展指導会 1915年(国会図書館蔵)巻末の渋谷商店広告による
- 41) 河野公平『南洋総覧』好文館出版部 下編名鑑 P.233 1920年
- 42) 蘭領スマトラ在留邦人渋谷常五郎ニ対スル和蘭国ノ戦時利得税ニ関スル件」1921年7月 JACAR (アジア歴史資料センター) B12082738100 (外務省外交史料館史料B-3-14-1-7) には、税金を払わずに帰国した渋谷に対して、在留邦人がその対応についての問い合わせた書簡が収録されている
- 43) 滋賀県立八幡商業高校服部学事務長からのご指摘
- 44) 前掲福田『南洋画報 第二巻』
- 45) 伊藤友治郎『第二回 南洋年鑑 附興信録』(日南公司南洋調査部 1918年 復刻版 龍溪書舎 2011年)
- 46) 越村長次『南洋渡航須知』南洋協会台湾支部 1919年 P.423
- 47) 前掲越村『南洋渡航須知』P.432-433
- 48) 日本人によりメダンで発行された絵葉書には、Ky. Asahi と I. Iwasaki のほかに Asahi & Co の物があるが、これは国松文治が経営した旭商会の商品である。
- 49) 澁川環樹『カメラとペン 蘭印踏破行』有光社 1941年 P.165
- 50) 伊藤友治郎『第三回 南洋年鑑』(日南公司南洋調査部 1919年 復刻版 龍溪書舎 2011年)
- 51) 前掲塩見平之助『南洋発展』の広告欄に掲載された都ホテルの住所から
- 52) 前掲伊藤『第三回 南洋年鑑』
- 53) 前掲『南洋総覧』P.199
- 54) 金子光邦『スマトラ縦走横断記』台湾大亜細亜協会 1937年(京都大学図書館蔵)
- 55) 日本人墓地のお堂に記載された、メダン日本人学校校長木下唱司が作成した名簿(1992年9月現在)
- 56) 外務省外交史料館史料I-1-5-0-2-7-4
- 57) <http://ameblo.jp/kakek/entry-10861151947.html>
- 58) Meta Sekar Pujiastuti "Apakah Mereka Mata-Mata ? Orang-orang Jepang di Indonesia (1868-1942)" Pererbit Ombak, 2008